

ジッドと「ヴィ・ウールーズ賞」：『狭き門』の選出 辞退をめぐって

吉井, 亮雄
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7162038>

出版情報 : Stella. 42, pp.45-76, 2023-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de
l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :

ジッドと「ヴィ・ウールーズ賞」 ——『狭き門』の選出辞退をめぐって——

吉 井 亮 雄

フェミナ賞はゴンクール賞やルノー賞などと並び、フランスの主要文学賞のひとつとして夙に名高いが、ジッドの『狭き門』（1909年）が一時同賞の前身「ヴィ・ウールーズ賞（Prix Vie Heureuse）」の受賞候補に挙がったこと、しかしその選考過程で作家が自ら候補から降り、選出を辞退したことは、ごく稀に文学史の片隅に記されはするものの、一般には果たしてどれほど知られているだろうか。本稿では、この一件にかんする従来の通説を確認したうえで、稿末に補遺として掲げる関連未刊書簡の参照をつうじて、事柄の経緯を実証的に追跡・考察したい。

『狭き門』は、ジッドを中心に志を同じくする作家たちが共同で編集にたずさわり、少なくとも兩次大戦間のフランス文学を主導した月刊誌『新フランス評論』の創刊を飾った（初号から3回連載）。雑誌掲載と並行してジッドはこの新作の単行出版を、『ユリアンの旅・パリュード』第2版（1896年）以降、自著の大半を刊行してきたメルキュール・ド・フランスに委ね、16折小型の豪華紙初版と12折普及版との2種類の版本を準備する。先行した『新フランス評論』の校正作業の成果を利用しながら、まず初版の校正がすすめられ、次いでさらにその新たな手直しを普及版の校正に転写するというかたちが採られた。印刷部数にかんし途中若干の逡巡は見られたものの、満を持しての出版であったと言える。かくて世に出た『狭き門』は読書界での高評価を背景に、ジッド作品としては珍しくよく捌け、著者に経済的利益をもたらす初の一書となる（それまでは売り上げ部数に応じて返金される自費出版というのが実情であった）¹⁾。

*

まずは従来の通説を確認しておこう——。それによれば、ジッドは1909年の11月半ば、『狭き門』が「ヴィ・ウールーズ賞」の候補リストの筆頭に挙がっ

たことを知る。「挿絵入り女性誌」を謳う『ラ・ヴィ・ウールーズ』（1902年、アシェット社を版元に発刊）の編集長カロリーヌ・ド・ブルーテル夫人（1865-1940）が1904年に創設したこの賞は、前年創設のゴンクール賞と同じ日に授与され、受賞者にはやはり同額の5,000フランを贈っていた（第一次大戦後は雑誌合併にともない「フェミナ＝ヴィ・ウールーズ賞」、次いで単に「フェミナ賞」と名称を変えて今日に至る）。20名ほどの女性ばかりからなる選考委員会は、早くも創設の翌年度にはロマン・ロランの『ジャン＝クリストフ』に授賞することで、その名を世間に知らしめていたが、今回は成功をいっそう確実なものにすべく『狭き門』選出の準備を進めていたのである。しかし、この動きを逸早く察知したジッドは、丁重かつ毅然たる態度で自著の選出を辞退する。その理由や如何？ たしかに、かかる文学賞の類は誇大な宣伝とジャーナリズムの協働による文壇の慣習にすぎぬと、彼やその友人らは嫌悪の念を公言して憚らなかった。だがこの場合、本当の理由は外のところにあったのだ。発端は数カ月前、はるかに控えめな賞ではあるが、「国民文学賞 (Prix national de Littérature)」をグループのふたりの友人、エドモン・ジャルーとエドモン・ピロンが激しく競り合い、結果的に後者が受賞したことだった。落選者を慮ったジッドは、『新フランス評論』8月号のノートで、両人の作品は甲乙つけがたい旨を巧みな筆致で強調する²⁾。ピロンが選ばれたこと、それはそれでよし。しかし11月、またもジャルーの小説『あとは沈黙……』（同年4月刊）³⁾が『狭き門』に次いで「ヴィ・ウールーズ賞」の有力候補に挙がっていることを知るや、ジッドはこの機を逃さず、友人の栄誉と実益を願って自らは選出を辞退するという挙に出る。そして彼の好意と寛大さに根ざす目論見どおり、翌月には晴れてジャルーの受賞が決まったのである⁴⁾……。

この通説は、すでに印刷公表されていた2通の書簡にもとづき形成されたと言ってよい。まず第一の資料は、ジッドがド・ブルーテル夫人に宛てた次の書簡（無署名の下書きだが、文面は完結している）――

《ジッドのド・ブルーテル夫人宛（下書き）》

[パリ, 19]09年11月20日〔土曜〕

奥さま、拙著が「ヴィ・ウールーズ賞」の候補リストの先頭に挙がっていることを知り、驚いております。

候補者として名乗りを上げたことは一度もありませんし、貴女あなたのリストに載りうる

条件を充たしているとすれば、それもまた大きな驚きです。したがって、私をリストから外し、『ラ・ヴィ・ウールーズ』誌やメディアに私の名が候補者のひとりとして出ぬようご配慮をお願い申し上げます。

しかしながら私にお示しくださる栄誉はまことにありがたく、貴女と、また委員会のなかにおいでであろう私の友人女史たちにも厚くお礼申し上げるとともに、皆さま方に本状の内容をお伝えいただければと。敬具

もうひとつの実証的な資料としては、同日ジッドがアンリ・ド・レニエに宛てた次の短い一節――

《ジッドのレニエ宛（下書き）》

[パリ, 19]09年11月20日〔土曜〕

私の思うに〔ヴィクトル・〕シリル（〔と彼を推す選考委員〕セブリーヌ夫人）以外に怖れるべき候補はいませんが、ジャルー氏のチャンスを高めるためにド・ブルーテル夫人に手紙を書きました。〔…〕

事情を別言すれば、以上2通（稿末提示の関連書簡《2》《3》）の外には、具体的な記述を含む資料はほとんど何も活字化されていないということである。

しかしながらパリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫には、ジッド自身の手で「1909年12月から1910年1月/『ラ・ヴィ・ウールーズ』誌一件/ド・ブルーテル夫人およびマルドリユス（^{まなこ}眼！）宛書簡」と記された封筒が保存されており（ただし実際には「1909年11月から」とすべきところ）、そこにはすでに言及した関連未刊書簡の大半が収められていたのである。これらを通読すれば、一件の経緯・様相は通説とはかなり違ったものになってくる。まずは、先のド・ブルーテル夫人宛の選出辞退通知に先立つ11月14日、『千一夜物語』のフランス語訳で著名なジョゼフ＝シャルル・マルドリユス（その妻は当代有数の閨秀作家リュシー・ドラリュ＝マルドリユス）が『狭き門』の著者に宛てていた些^{いささ}か厳しい調子の書簡を紹介しよう（なお、以下に引く各書簡の番号は稿末補遺のそれに対応。テキストの訳出は、読みの簡便を優先して、削除箇所を除く最終形のみを対象とする。またそれらの記述内容についてはフランス語原文に附註しているので、本文での事項説明は必要最小限にとどめる）――

《書簡1・マルドリユスのジッド宛》

[パリ, 19]09年11月14日（日曜）

親愛なるジッド、

アマンド王女〔妻の愛称〕は、毎年賞金5,000フランを授与する「ヴィ・ウールー

ズ賞」の選考委員会の一員ですが、貴兄が本当に候補者なのか否かを知りたがっています。というのも、受け取ったばかりのリストに貴兄の名前があるのを見て、ご自身の与り^{あずか}知らぬところで、版元の意向だけでそうなったのではないかと推測しているからです。

〔しかし〕もし事がご自身に依るものならば、王女が貴兄に戦いを挑むことになるのをゆめゆめお疑いなさるな。

この同じリストには次の名前が挙がっています。

エドモン・ジャルー

ジョアシャン・ガスケ！

ジュルナ＝プロヴァン、等々。

はっきりお答えあれ。ウィカノンか。そしてここにおいでになるなら、前もって一言知らされたし。激して。

J・C・マルドリユス

具体的な経緯はおいおい見てゆくが、ジッドが『狭き門』の選出辞退を委員会に通知したのは、明らかにこのマルドリユス書簡を受けたことが元となったのである。ただ、上記のド・ブルーテル夫人宛書簡までに6日を要しているのは、さらに具体的な情報確認の必要があったからであろう。後掲書簡《7》にかんする補説でも言及するが、マルドリユス宅に直接出向いた蓋然性は高い。

さて、前掲書簡でのジッドの質問と選出辞退の意思表示に対し、ド・ブルーテル夫人からは翌日付で次のような返事が届く――

《書簡4・ド・ブルーテル夫人のジッド宛》

〔パリ〕, 1909年11月21日(日曜)

「ヴィ・ウールズ賞」への応募というものはなく、委員会自体が注目したい本を選定いたします。

つまり、私たちのリストに載るための条件は、素晴らしい本を著したことをおいてはなりません。それこそが、このリストの先頭にあなたのお名前が載った理由です。あなた以外の誰もが驚くことはありませんまい。

金曜日〔11月19日〕に開催された前回の会議で「ヴィ・ウールズ賞」委員会は、この称賛があなたのご経歴にとってさほど無用なものでないならば、満票を獲得するであろう作品として、ご高著が選出されるべきとの意を全会一致で表明いたしました。

『狭き門』を熱烈に称賛する方々が、その称賛を公表する喜びを失うことは残念でありませんが、ご希望が尊重されることは言うまでもありません。委員会の決定を実行するのはこの私であるだけに、ご希望に沿うのは容易なことです。

しかし、もし機会をいただけるならば、直接お会いして理由をご説明するつもりですが、お手紙は公になさらぬようお願い申し上げます。

また、投票に先立ち今月末に発行されるクリスマス号で、委員会が〔候補作として〕

選り分けていた本のなかにご高著が含まれておりましたならば、これもまたお詫びいたします。と申しますのも、その号は一週間前から印刷にかかっており、すでに内容の変更は不可能だからです。しかしながら、この最初の記事は選ばれた本の書誌的な記述にすぎず、かようなかたちで私のたちの取り組みが不謹慎なものと思われぬことを願うばかりです。かしこ

C・ド・ブルーテル

ジッドの希望は承知した、具体的なところは会って直接説明したい、だから先に頂いた手紙は公表しないで欲しい、という夫人であったが、翌週になっても連絡がない。ジッドは再度問い合わせざるをえない――

《書簡5・ジッドのド・ブルーテル夫人宛（下書き）》

〔パリ〕, 1909年11月28日（日曜）

奥さま、ご親切にも貴女は有用なご説明を直接してくださいと仰いました。いつお会いできるかご教示のほどという私の手紙にお返事がないので、心配しております。

お手紙を拝読し、私が最初に表明した懸念が正当化できるものではないことが分かりました。貴女ご自身が、私の経歴にはこの賞がさほど重要なものでないことを認めてくださっているのですから。とりわけ私としては、自分の成功以上に友人エドモン・ジャルーの成功を嬉しく思うだけに、それこそは彼から成功を奪うことに外ならぬと考えるからです。私の名前が競争相手のあいだで言及され、公表されるのを防ぐにはもはや遅すぎたということなので、お手紙を拝読し、貴女は最善の行動をなさる、そして賞を争わぬと主張していた者を、選外者の気まずく不快な立場からお救いくださると確信しておりますので、貴女にはお手紙を差し上げなかったかのようにお振る舞いくださって結構です。だからこそ、私は噂が立たぬよう願うことができたのですが、しかし拙著を「対象外 (hors concours)」と発言してくださるや、事はすべて好い方に転じるであります。

奥さま、お手紙に私がどれほど心打たれたかを、ひどく拙い言葉でしかお伝えしていなかったと存じます。直接お会いして、感謝と尊敬の念を伝えさせていただければと願っておりました。

後掲のマルドリユス書簡《7》《11》などの詳細な記述によれば（ジッドとも交流のあったメリー・デュクロー夫人〔註6参照〕の証言も記されるからには、その信憑性にまず疑義は挟めまい）、実際には、この手紙に2日先立つ11月26日（金曜）には、「マルドリユス夫人の一票を除いた全会一致で、ジッドの立候補は排除が決定されていた」のである。さすれば、そのような経緯にはいっさい触れぬ翌29日のド・ブルーテル夫人の返事は、丁寧な言葉使いにもかかわらず、いかにも弁解がましく映ってしまう――

《書簡6・ド・ブルーテル夫人のジッド宛》

[パリ], 1909年11月29日(月曜)

拝略。お手紙を頂戴し、毎日お返事を差し上げたいと思っておりましたが、書店〔『ラ・ヴィ・ウールーズ』誌の版元アシェット〕に行く暇もなく、年末の激務を終えて夜帰宅しても気力も萎えてしまい、まことに申し訳ございませんでした。

昨日の日曜日は、我らの友人〔スイス人作家のエドゥアール・〕ロッドに会いに行くことになっていたのですが、自分で呼び鈴を鳴らしてお邪魔する手間を省きたかったのですが、楽観的に考えて午前中に終わらせようと思っていた仕事が終日続いてしまい、オートウイユ〔ご自宅〕に何うのはまず無理だと分かったのです。という訳で、ご親切にもお認めくださるとの由、いつか朝にでも、できれば9時から正午までに書店においでいただけないでしょうか。とりわけ今週は「ヴィ・ウールーズ賞」の件で、時間を見つけて多くの準備会議に出席し、あなたと共に私が望んでいる結果をいっそう確実なものにしたいので、午後は書店を留守にすることが多くなってしまいそうなのです。

今朝のお手紙、そして私への共感と信頼のお気持ちに、私の方こそ感動しております。美しいご高著を（恥ずかしながら、私が存じ上げている唯一のご本ですが）深く賛嘆しておりますだけに、なおさら心を動かされました。近々ご著作すべてに親しみ、あなたご自身とお知り合いになれるとすれば、まことに幸甚に存じます。

C・ド・ブルーテル

夫人の返事と同じ日の朝、マルドリユスはジッドに、慌ただしく^{ブヌーマティック}気送速達を送り付けてくる（そのなかに記された「貴兄にはすでにすべてを説明した」なる文言から推して、ジッドはこれに先立ちマルドリユスに会っていた蓋然性が高い）。活字転写では視覚的な異様さが十分に伝わらないが、書状のオリジナルには随所に下線による強調が施され（二重下線・三重下線にくわえ、赤鉛筆での下線さえもあり）、何ともただならぬ印象を与えるものであった――

《書簡7・マルドリユスのジッド宛（気送速達）》

[パリ, 19]09年11月29日(月曜, 午前9時)

愛する高貴なるジッド、私は貴兄が問題の夫人に送った品位ある、廉直で趣味のよい手紙を称えます。暴君のように見えても、そうです、私ほど人生における貴兄の真つ当な態度、堅固さ、勇気を前にして友愛の念あつく頭を垂れる術を知る者はおりませぬ。だから貴兄は私の友であり、私が尊敬する数少ない人々のひとりなのです。嗚呼、親愛なるジッド……、しかし今日は私の優しさをすべて抑えて申し上げます。

我々を結ぶ友情にかけて、そして貴兄の名誉、我らの名誉にかけて、これ以上一刻たりとも、貴兄がああ夫人の「委員会の榮譽のため」と称する策略に巻き込まれぬようお願いしたいのです。貴兄にはすでにすべてを説明しました。彼女が何を言おうと

も、それは二枚舌と打算に外ならず、ただ事態をできるかぎり長引かせ、貴兄の大切な名前を、我らのジッドを利用するためのものなのです。

友よ、私は貴兄に叫ぶ。私の言葉に耳を傾けなさい。

ただちに彼女の自宅（サン＝ミシェル大通り75番地）に宛て、あの手紙に対する返事を「気送速達」で送りなさい。断固たる態度で（しかし丁重に）、貴兄は自らの決定を変えることはない、そして自分の最初の手紙が今週金曜日〔12月3日〕の合会で全員の前で公に読まれることを絶対に主張する、そう書き送るのです。もし彼女が読み上げたくないのであれば、〔選考委員のメリー・〕デクロー夫人あるいは、だれか他のご夫人にそうするよう指示するとも付け加えてください。そして気送速達での即刻の返事を求めます。また彼女らの雑誌のクリスマス号がすでに印刷中である（かつて知ったる言い逃れ！）としても、貴兄の名前を削除し、何が何でも紙面から下ろすよう要求なさるのです。友よ、くれぐれもよろしく願います。〔…〕

まなこ
眼

追伸——この「ご夫人」は〔貴兄との〕面会の件については知らぬ振りなので（私には分かっていた！）、ふたたび手紙で彼女にそのことを言っても無駄。彼女と周りの面々に呪いあれ！

遅くとも水曜日〔12月1日〕の朝までに彼女が同意しなければ、ただちにお知らせいただきたい。いずれにせよ、私に事の進展を教えられたし。

マルドリユスの気性の荒さが前面に出た書状でもあるが、前述のようにジッドと交流のあったデクロー夫人の名を出して信憑性を高めるなど、その具体的な記述は以後も一貫して揺らぐことがない。

だがジッドが危惧していたように、12月15日付ながら早くも前月末に発行された『ラ・ヴィ・ウールーズ』誌には、「《ヴィ・ウールーズ賞》の候補者たち」と題する記事が掲載され、ジャルーやヴィクトル・シリル、アンリ・マロ、レイ・デルズン、ヴィオレット・ブイエ＝カールら20名ほどの作家に先立ち、『狭き門』の著者がいかにも最有力のごとく紹介されてしまうのである——

アンドレ・ジッド氏はすでに初期の作品から、今日の最も優れた才能が輩出した文学世代のなかでも、ひととき注目された作家のひとりであった。現在40歳になるこれらの作家たちは、20歳でひとつの理想主義的なグループを結成していた。その後、彼らは様々なあり方で実人生へと立ち帰ったが、ジッド氏ほど当初の思想の気高さ³に忠実でありつづけた作家はいない。

一般にはさほど馴染みのない名かも知れぬが、非常に気高く純粋な作家である。氏が今夏発表した小説『狭き門』は、ひとつの意識を描き切った数少ない作品のひとつだ。アリサは母の不貞を目の当たりにし、信仰者に完璧への狭い道を歩むよう勧める牧師の説教に心を動かされる。同時に彼女はジェロームを深く愛した。この愛は、犠

牲心によって妨げられることで、彼女の想いをさらに高貴なものにする。やがてふたりのあいだに障害はなくなる。だがアリサは、聖性の高みへと熱く昇りゆくことで、己の愛を超越してしまい、ジェロームの先を歩んできた道によって彼とは引き離されてしまう。「子供のころに私が美しくなりたいと願ったのは、すでに彼がためであった、そう彼女は言う。今となっては、私はただ彼のためにしか《完璧の追求》を目指してこなかったように思えるのだ。そして、神さま！この完璧は彼抜きでしか達成できぬということが、あなたの教えのなかで最も私の魂を動揺させるのです」。この美德と愛との相克ゆえに彼女は死ぬ。ジッドの冷静かつ正確にして悲痛な作品は、かくのごとき葛藤がいかに悲劇的でありうるかを鮮やかに感得させるのである。⁵⁾

すでにジッドは夫人との面談を予定していたが、この記事に接するや、丁重な修辞をもちいながらも抗議と訂正文掲載の要求を書き送らざるをえない――

《書簡8・ジッドのド・ブルーテル夫人宛（下書き）》

〔パリ、1909年〕12月1日〔水曜〕

奥さま、これこそがまさに私の怖れていたことです。『狭き門』の記事がどんなに好意的なものであろうとも（そして私とその記事をどんなに有難く感じているか、貴女には申し上げますが）、それによって、事情に通じた僅かな人たちを除けば、誰の目にも、依然として私は競争を望んだ候補者として映ってしまうのです。〔このように〕感謝よりも逆恨みを優先させるとは、なんと自分自身を不快な気持ちにさせてしまうことか！奥さま、再度お詫び申し上げますが、明朝に予定していた『ラ・ヴィ・ウールズ』訪問はできそうもありません。そのためこの手紙は、お約束していた貴女との会話に代わるものでなければなりません。貴女が再びこの授賞選考を話題に取りあげ、そしておそらくその結果を公表なさる号では、私がこの競合からは降りたこと、少なくとも立候補はしなかったことを絶対に明記していただきたい。以下は、この棄権・拒否を示すべき文章です――

「ジッド氏は、不意にも候補者のなかに含まれてしまったが、その名を候補者リストから削除するよう我々に要請している」、あるいは、すでにこのリストについて話題に挙げているのであれば、「ジッド氏は、承知せぬうち載せられていた自身の名をリストから削除するよう我々に要請してきた」。これは私の根本的主張です。せっかくご親切にいただいたのに、反感を買いかねぬ公然の抗議をせざるをえないのは残念です。どうか、私がお示しする文案をただそのまま採ることで、そういった抗議を完全に無用なものにしてください。私に賞を与えない他のいかなる理由も私を納得させることはできませんし、これ以外のいかなる理由によっても自分自身が充たされたと思うことはありません。

奥さま、貴誌〔『ラ・ヴィ・ウールズ』12月15日号〕に載った賛辞の文にどれほど心を打たれたことでしょうか。どなたがお書きになったものなのでしょうか？間違いなく、注意深く思慮のある女性読者のおかげでしょう。拙著に対する分析は秀逸です。

私のヒロインを愛の彼方へと運び、決死の努力で目的を越えさせる、身をもって獲得した感情の^{ほとばし}りを示しています。読者の4分の3は、この本をキリスト教徒の女性が信仰のために愛を犠牲にしているとしか見ていないのです。

ロッド氏とお知り合いだったとは存じませんでした。私自身を発見する方法を教えてくださいました氏にはとても感謝しています。というのも、彼は私のこれまでの著書も知らなかったからです。『狭き門』は私が少しばかりプレス・サービスをした最初の本なので——この本が以前の作品よりもはるかに優れていると思うからではなく、この予め定められた負^{いっしょ}け戦と、「批評」の洞察力と寛大さに対する己の幾分楽観的すぎる信頼に飽き始めていたからですが——、そのこと自体はほとんど驚くには当たりません。私は、あまりにうまく身を隠してしまったために、人が探すのに飽きてしまった子供のようなものだったのです。結局のところ、拙著がお気に召さないのかも知れませんが……。そんなことはかまいません！ この賞の一件が片づいて余裕がおできになったら、『狭き門』の対応物・カウンターパートである『背徳者』を喜んでお送りします。一方がなければ、もう一方を書くこともなかったであろう作品です。

さようなら、奥さま。今日の日曜〔12月5日〕、夕刻にロッド氏宅でお会いできることを楽しみにしております。敬具

これに対してド・ブルーテル夫人は翌々日、弁明と詫びの書状を送ってくるが、同日の選考委員会でジャーラーへの授賞が正式決定したことには一言も触れていない。そして夫人との書簡交換は結果的にこれが最後となるのである——

《書簡9・ド・ブルーテル夫人のジッド宛》

パリ、〔19〕09年12月3日〔金曜〕

取り急ぎ一言、私の方からお手紙を差し上げなかったことをお詫び申し上げます。私どもの記事に掲載いたしたい文案をお送りします。私の思うに、あなたが送ってくださった文章は委員会各員の自尊心を傷つける虞^{おそれ}があり、何よりも将来にさまざまな禍根を残すことになりかねません。すでに私は真に価値のある作品が受賞するべく、ひどく難儀しております！ あなたが拒否したことを盾にとって来年、委員会が真の才能を否定し、無価値あるいは凡庸さを助長するようなことがあってはなりません。私がお送りする文案は、あなたのご希望を充たすとともに、それにもまして委員会が表明した意見との違いを示すものとお思いになられないでしょうか。かしこ

C・ド・ブルーテル

日曜〔12月5日〕にはエドアール・ロッド氏宅に参ります、そこでお目にかかれれば幸いに存じます。

一方、マルドリユスとの遣り取りは今しばらく続く。ジッド側の書簡としては、12月3日ないし4日の未完の下書きしか残っていないが（稿末資料《10》を参照）、書き換え・加筆を経て実際に送られた手紙は、マルドリユスの意見を

認めながらも、彼の説明に対して何らかの異議を唱える内容になったものと思われる。それを受けた文通者からの反論と諫言は次のとおり——

《書簡 11・マルドリユスのジッド宛》

[パリ, 19] 09 年 12 月 4 日 [土曜]

お手紙を受け取りました。そのなかで貴兄は、もし自分が黙っているように注意していれば、間違いなく受賞していただろうと述べている。

つまり貴兄は、11 月 26 日 (金) の会合後にドラリュ＝マルドリユス夫人が貴兄に告げた会合の結果について疑念を投げかけているのです。

その疑念がいかにも不快なものであるかを示すため、私は以下の言葉を手紙に書いて、貴兄に繰り返したい。

11 月 26 日金曜日、(マルドリユス夫人の)一票を除いた全会一致で、貴兄の立候補は排除が決められました。そして〔選考委員のジャース・〕デューラフォワ夫人は、私の妻と非常に激しい議論を交した後、次のように結論づけたのです——「ジッド氏は受賞に必要な条件を充たしていないということで、その申請が決定的に却下されたからには、他の候補者たちの検討に移りましょう」。

これが実際に起こったことだったので。

爾来、この会合でも昨日の会合でも、貴兄の名前は一度も出てきていない。

このことは、辞退を告げる手紙がド・ブルーテル夫人に届くずっと前に貴兄が排除されたことを如実に物語っている。さらに夫人は昨日、少なくとも私の妻がいるところでは誰に対しても、貴兄の辞退のことは話題に出さなかった。最後に付け加えれば、デュクロー夫人は昨日、妻の質問に対して、まさしく次のように語ったのです——「ああ奥さま、仰るとおりです。ジッド氏の本はとても見事なものです。私はそれについて『タイムズ [芸芸付録]』に長い文章を載せました⁶⁾。ジッド氏が賞の条件に適っていないとはいかにも残念なことです」。

[ジッドからブルーテル夫人による「掲載予定文案」を示されて曰く] 今や夫人は何とでも好きなように書ける。彼女には私がここに書いている内容を否定しようとは決してしないだろうし、否定もできますまい。20 人の夫人たちが証言してくれましょう。

最後に、この話を本当にお疑いになるのであれば、今後私たちが貴兄に会うのは叶わぬこととお伝えしておこう。その場合、今後一切貴兄を評価せぬばかりか、私には言語道断だと思われる行為について種々説明を求めることをご容赦願いたい。

マルドリユス博士

半ば縁切り状にも似たこの激烈な通告に続けて、マルドリユスは翌朝にもまた同様の旨を述べた気送速達を送りつけてくる——

《書簡 12・マルドリユスのジッド宛 (気送速達)》

[パリ, 1909 年 12 月 5 日] 日曜, 午前 11 時

ジッド、貴兄の手紙は、ご自身の疑念を撤回することで、私というひとりの人間を

満足させはしたが、その友は依然として深い怒りを抱いている。ドラリュ＝マルドリユス夫人も私と同様、怒っています。[…]

貴兄が最終段階で除外されることもありえたとはず思えません。なぜなら、貴兄は当初、ほとんど私の妻と、ごく初めの段階での1人か2人の漠然とした声にしか支持されていなかったからです。そして、その1人か2人も11月26日金曜日には、貴兄の排除を決めた女性たちに急いで加わったのです。

これは11月26日金曜日に関わったことで、貴兄の手紙がド・ブルーテル夫人に届く少なくとも2日前のことです。

つまり、貴兄は彼女たちによって排除された候補者であり、自ら辞退した候補者ではない。私はあらゆる口調で、あらゆる言葉で、この話を繰り返しましょう。そうすれば、貴兄は私が最初に警告を発した日から、つまり26日の排除の週よりもずっと前から、嗚呼、実現しなかった「奇跡」を待つことなく、辞退届を出すべきだったと理解し、感じることでしょ！

貴兄が私に送ってきた、幻想を煽る『ラ・ヴィ・ウールーズ』掲載〔予定〕の註記について言えば、それは単なる外交辞令なのです。[…]

昨日、私たちはギヨーム・ビエ夫人宅での夜会に行きました。ド・ブルーテル夫人（ちなみに、私たちは間もなく彼女の家で食事をする予定）を含め、委員会の女性たちはほとんど全員がそこにいました。そして私は、すでにお知らせしていたことすべてを、今度は一点一点、自分の目で確認することができたのです。[…]

私の側からの結論として付け加えさせていただければ、私の見るところ、貴兄は今、自らの手で名誉なき負傷者となり、友情という点では、その翼に大量の弾丸を受けて〔重傷を負って〕いるのです。[…]

貴兄の驚くべき混乱ぶり、子供じみた二重の見解、不毛な躊躇を助長なさい。しかし、何事にも限度があることをご承知おきあれ。

さらば、まさに恨みをこめて。

J・C・マルドリユス博士

この速達に対して、ジッドは即日返事を認める。保存されているのは削除や加筆の多い未完の下書きであるが、その大要――

《書簡13・ジッドのマルドリユス宛（下書き）》

〔パリ、1909年12月5日（日曜）〕

親愛なるマルドリユス、

あなたが私を「私の高貴なジッド」と呼び、私がド・ブルーテル夫人に送った「品位ある、廉直で趣味のよい手紙」などと褒めてくださった電報〔気速送達〕は29日付です。つまり、私たちの友情（正確に言えば私に対するあなたの友情）が〔翼に弾丸〕を受けたのは、それ以前のことはありません。[…]

断言いたしますが、この愚かしい出来事から私が出たものは、ただ王女をいつときも怒らせてしまったという悲しみと、あなたを中傷するような意見に与ってしまったと

いう後悔の念だけなのです。[…]

あなたが虚偽だと仰せの考えを、私はたとえ自分自身の内でさえも持ち続けようとは思いません。私がいかにしてこうした考えに至ったか、そしてそれは何らあなたを傷つける意図のもとではないことは、昨日あなたにご説明しました。私はそれを擁護・主張するのではなく、捨て去ることに同意するのです。[…]

かくてジッドはマルドリユスの諫めを是とし、謝罪・恭順の意を表する。しかしながら心中は決して唯々諾々というわけではなかったであろう。というのも、翌6日、新受賞者エドモン・ジャルーに宛てた短い書簡《14》では次のような追伸を書き付けているからだ——「あなたの熱のこもった電報には実に心打られました。だが、よかった。私の方は J・C・M〔マルドリユス〕と仲違いしてしまいました……！」⁷⁾。

おそらく年末には出来た『ラ・ヴィ・ウールーズ』（1月15日号）にはようやく次のような経緯説明の一文が掲載された——

アンドレ・ジッド氏は「ヴィ・ウールーズ賞」選考委員の何人かによって提案されていた。若い文学世代の良心的な導き手のひとりであり、思想的価値と誇り高い独立不羈によってその役割を担ってきたこの作家が、委員たちの投票に相応しいと見なされていたのである。ご承知のように、これは立候補によるものではなく、委員会が全き自由のもとに選出するのであり、どの作家も候補者として推薦されてはいない。アンドレ・ジッド氏は、まこと高潔な寛大さをもって、候補から外れるべきだと考えた。自らが賞の授与条件に適しているとは判断ささらなかったのである。委員会としては氏の決断に従うほかなかった。⁸⁾

年が明けて届いた1月4日付のマルドリユス書簡《15》からは、ジッドが前日午後に彼の家を訪ねたことが分かる。この手紙に対しジッドは翌々日の返答で、軽い皮肉のこもった修辭的表現をもちいながら、お互いこれまでの経緯や拘りを捨てて、以前と変わらぬ友好的な関係を維持しようと提案する——

《書簡16・ジッドのマルドリユス宛（自筆の写し）》

〔パリ、1910年〕1月6日〔木曜〕

高名なる眼、博士よ！

私の友情の翼は以前のままであるので、友愛の気持ちがあなたへと向かうのは何という喜びでしょう！ただしそれは、あなたご自身の友情が、先のお手紙で私の翼に弾丸の粒を浴びせたことにもはや苦しまれなくなってから。手術のベテランであるあなたには、今こそその弾丸の粒をすっかり取り除いていただかなくてはなりません。もう

お済みでしょうか。仰ってください。直ちにアマンド王女の足下へ参上いたします。
アンドレ・ジッド

ジッドの要請・提案に対し、マルドリユスのほうも翌月5日の書簡《17》で、「友情の翼にはもはや弾丸かけら一粒さえも残ってはいません。私の外科的知見のすべてを駆使して除去しました」と応じている。かくして2カ月半来の複雑な事態はここに一応の決着を見たのである。

一件の背景にはマルドリユス夫妻、とりわけ妻リュシーとド・ブルーテル夫人との以前からの齟齬・軋轢があったと推測されるし、書簡交換の流れを追うかぎり、情報の歪曲や出し惜しみ、返答の遅延など、ジッドに対する夫人の対応にはたしかに不実な点が少なくない。さりながら、マルドリユスの強引・執拗ともいえる介入と、これによってジッド自身が蒙こうむったであろうそれなりの心理的抑圧は、やはり両者の関係に微妙な影を落とす要因となったのではあるまいか。以後も若干の交流は続くものの、やがて書簡の遣り取りは途絶え、友情は明らかに希薄化していったからである⁹⁾。

最後にごく簡略ながら、ジャルーと『新フランス評論』グループとの関係についても触れておこう——。年の瀬も押し詰まった12月21日、同誌の中心メンバーたちは一同に会してジャルーの受賞を祝う。ジッドをはじめ、ジャック・コポーやマルセル・ドルーアン（筆名ミシェル・アルノー）、ジャン・シュランベルジェ、アンリ・ゲオン、アンドレ・リュイテルス、ピエール・ド・ラニユックス、ジャック・リヴィエールら、総勢20名ほどがパリ10区のレストラン・マルグリーに集う。グループ全体の慶事としての催しであった¹⁰⁾。しかし同年から翌1910年にかけて、『新フランス評論』とジャルーとは、それぞれが独自の方向に歩みを進め、互いの距離感が次第に大きくなっていったのである。後者はレニエやジャン＝ルイ・ヴォードワイエ、リュシアン・ミュルフェルド夫人のサロンに足繁く通い、ポール・フォール主宰の季刊誌『誌と散文』などパリの文芸誌、エミール・シカール主宰の『灯火 (*Le Feu*)』などの地方雑誌への寄稿を始める。一方、自分とは離れたところで組織化されつつあった『新フランス評論』グループとも交流を続け、創刊後間もない同誌への協力に同意していた¹¹⁾。だが実際の寄稿は数えるほどで、1910年の2月・5月に彼がヴォードワイエ、レニエの新刊を評したノートにいたっては¹²⁾、ジッドらが忌避していた自己満足・世俗主義の顕れと見なされてしまう。日刊紙への寄稿も開始し（主

としてコントの連載),それが前衛的な文学集団との距離をさらに広げることとなった。このようなジャーの姿勢・活動を近くで見聞きするジッドとしては、友情を崩すようなことはないにせよ、「我々は人生の同じ側には立っていない」と、もはや相手とのあいだに穿たれた溝を認めざるを得なかったのである¹³⁾。

註

- 1) 『狭き門』の生成過程や出版の経緯については次の拙稿を参照されたい——吉井亮雄「ジッド『狭き門』の成り立ち——構想・執筆から雑誌初出、主要刊本まで」、『文学作品が生まれるとき——生成のフランス文学』所収、京都大学学術出版会、2010年、375-397頁。
- 2) Voir la note d'André GIDE, «Le Prix national de Littérature», *La NRF*, n° 7, 1^{er} août 1909, pp. 79-80.
- 3) Edmond JALOUX, *Le reste est silence...*, Paris : Stock, 1909. 書名は『ハムレット』5幕2場の主人公の台詞「The rest is silence.」から採られたもの。内容としては、両親の微妙な関係、母の密かな不貞などを幼い子供の視点から描いた小説。邦訳は『子供は知っていた』(江口清・訳)、河出書房、1956年。
- 4) 従来の通説の概略は主として以下による—— Claude MARTIN, *André Gide ou la vocation du bonheur*, t. I [seul paru], Paris : Fayard, 1998, pp. 529-530.
- 5) *La Vie Heureuse*, 15 décembre 1909, p. 329. なお、この箇所をタイプ打ちにした紙片1葉がジャック・ドゥーセ文庫に保存されている(整理番号γ667-69, 1 feuillet 209 × 148 mm)。
- 6) Voir Anonyme [Mary DUCLAUX], «Strait is the Gate : *La Porte étroite*. Roman, par André Gide», *The Times Literary Supplement*, 19 août 1909, p. 300, col. 3 et p. 301, col. 1. デュクローは同年9月5日、スコットランドからジッドに宛てて絵ハガキを送っている。その文面は以下のとおり(フランス語原文は稿末の註13を参照)——「拝略。素晴らしいご高著をご恵投たまわり心よりお礼申し上げます。稀なる感嘆の念をもって拝読いたしました。ご高著の美点と私が考えますところは、8月20日付の『タイムズ』(文芸付録。この付録は毎週木曜日の『タイムズ』と翌日の週刊版に掲載されます)で述べておりますが、改めて私の深甚なる感謝をお伝えいたしたく。メリー・デュクロー」(ジャック・ドゥーセ文庫、整理番号γ1108-1)。
- 7) 書簡を採録した『ジッド=ジャー-往復書簡集』の校訂者は、イニシャル表記から、当該の人物を作家カチュール・マンデスの妻で「ヴィ・ウールーズ賞」の選考委員ジャーヌと推測するが、これは明らかに誤り。Voir André GIDE - Edmond JALOUX, *Correspondance (1896-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Pierre LACHASSE, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 2004, p. 234, note 268.
- 8) *La Vie Heureuse*, 15 janvier 1910, p. 5.

- 9) たとえば、1912年2月にはマルドリユス宅に刊出間もない戯曲『バテシバ』の限定版(ロクシダン文庫)を持参し、昼食を共にするなど若干の交流は続いたものの(voir *Journal, I (1887-1925)*. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p. 723), 書簡交換にかんしては、ジッドがマルセイユでマルドリユスの面識を得た1898年から(その後間もなく刊行が開始された『千一夜物語』のフランス語訳を『レルミタージュ』『白色評論』の時評で絶賛)1910年初めにかけては約50通が存在するのに対し、この一件以後は僅かにマルドリユス書簡が2通(1918年2月と1935年6月)確認されているにすぎない。
- 10) 12月10日のゲオン宛ジッド書簡は祝宴への参加を促すべき面々のリストを示している(voir André GIDE-Henri GHÉON, *Correspondance (1897-1944)*. Texte établi par Jean TIPY. Introduction et notes d'Anne-Marie MOULÈNES et Jean TIPY, 2 vol. [pagination continue], Paris : Gallimard, 1976, pp. 735-736)。ちなみに、このリストに名前が挙がっていたシャルル=ルイ・フィリップの訃報が一同のもとに届いたのはまさに祝宴当日のことであった。
- 11) ジャルーの1909年3月4日付ジッド宛書簡——「私が常にあなた方の仲間であることは、あなたもよくご存知のところ」(leur *Correspondance*, *op. cit.*, p. 229)。
- 12) Voir Edmond JALOUX, «*La Bien-Aimée*», par Jean-Louis Vaudoyer», *La NRF*, n° 13, 1^{er} février 1910, pp. 117-118 ; «*La Flambée*», par Henri de Régnier», *ibid.*, n° 17, 1^{er} mai 1910, pp. 674-675.
- 13) Lettre de Gide à Jacques Copeau, du 30 novembre 1910, dans leur *Correspondance (1902-1949)*. Édition établie et annotée par Jean CLAUDE. Introduction de Claude SICARD, 2 vol., Paris : Gallimard, *Cahiers André Gide 12-13*, 1987-1988, t. I, p. 415. また同日の『日記』の記述——「昨夜エドモン・ジャルーが訪ねてきて夕食を共にする。彼からすっかり遠く離れしまった自分を感じて苦しくなる。というのも、彼に対しては昔から好感を(だが少々硬化した好感ではあるが)抱いていたからだ。彼は社交界に出入りするの、ますますうわべを飾るようになり」、云々 (*Journal, I (1887-1925)*, *op. cit.*, p. 664)。

《 APPENDICE 》

Lettres inédites relatives
au « Prix *Vie Heureuse* » 1909

Dans la transcription des lettres ci-dessous, nous n'utilisons qu'un petit nombre de signes conventionnels : sont placés entre crochets droits [] les passages, mots et lettres *biffés* par chaque auteur (à l'exception des lieux et dates que nous avons complétés) ; entre crochets obliques < > ce qu'il a visiblement *ajouté* au premier jet de sa plume. Nous avons également placé entre crochets obliques les mots dont il a changé la place à l'aide d'un signe d'insertion ; précédés d'une croix +, ces mots sont mis à leur nouvelle place, et la place primitive est indiquée par la même croix entre crochets droits [+]. Ajoutons que la ponctuation, parfois insolite, est ici respectée.

***. - Enveloppe « Affaire de *La Vie Heureuse* »**

[de la main de Gide]

Déc 1909-1910-janvier *¹⁾

→ * 1)

Affaire de *La Vie Heureuse*

Lettres de et à Mme de Broutelles
 et Mardrus (œil !)

1. - MARDRUS à GIDE

12 QUAI D'ORLÉANS

[Paris,] Dimanche 14 Nov[embre 19]09.

Cher Gide,

[Ma] La princesse Amande *²⁾, qui fait partie du comité chargé de décerner le prix annuel de 5 mille francs *Vie Heureuse* désire savoir si vraiment vous êtes candidat. Car elle voit votre nom sur la liste qu'elle vient de recevoir, et suppose que c'est peut-être à votre insu, du fait seulement de votre éditeur.

→ * 2)

Si la chose est de votre fait, vous ne doutez pas, n'est-ce pas, de la lutte que livrera la Princesse.

Sur cette même liste, se trouvent les noms de :

Edmond Jaloux,
 J. Gasquet !!!^{*3)}
 Burnat-Provins^{*4)}, etc. etc.

→ *3)

→ *4)

Parlez. Dites un oui ou un non. Et si vous venez ici, prévenez
 d'abord par un mot.
 En véhémence.

J. C. M [ardrus]

2. - GIDE à Mme de BROUTELLES (brouillon)

à Mme de Broutelles

[Paris, samedi] 20 Nov[embre 19]09.

Madame, j'apprends avec étonnement que mon livre s'est
 trouvé porté en tête de la liste de concurrents pour le prix de
La Vie Heureuse.

Ma surprise est grande car je ne me suis jamais présenté
 comme candidat et je serais étonné d'offrir les conditions re-
 quises pour figurer sur votre liste, de sorte que je vous prie,
 Madame, de m'en effacer, et de faire en sorte que mon nom ne fi-
 gure pas dans *La Vie Heureuse* et dans « la presse » parmi ceux
 des concurrents. Je vous en serai très particulièrement obligé.

Veillez me croire néanmoins très sensible à l'honneur que
 vous me faites et dont je vous remercie ainsi que les amies que
 je peux avoir dans votre comité et auxquelles je vous prie de bien
 vouloir communiquer cette lettre.

Je vous prie d'accepter, Madame, l'assurance de mon respect
 et de mes sentiments les meilleurs.

[sans signature]

3. - GIDE à Henri de RÉGNIER (Brouillon)

[Paris, samedi] 20 Nov[embre 19]09.

J'ai écrit à M[adame] de B[routelles] afin de laisser le champ
 libre à M. Jal[oux] bien qu'il n'ait je crois d'autre concurrent à
 craindre que Cyril^{*5)} (Séverine^{*6)}).

*5) ←

*6)

J'aurais plaisir à le rassurer – aussitôt si j'avais son adresse –
 mais il doit venir me voir demain matin [...].

4. - Mme de BROUDELLES à GIDE

[Paris, dimanche] 21 Novembre 1909.

75 B^d S^t Michel

Il n'est point posé de candidature pour le Prix *Vie Heureuse*, le comité choisit lui-même les livres qu'il veut signaler.

Il n'y a en somme pas d'autres conditions requises pour figurer sur notre liste que d'avoir écrit un beau livre : voilà pourquoi votre nom s'est trouvé en tête de cette liste. Personne que vous n'en saurait être surpris.

À sa dernière réunion, Vendredi le Comité du Prix *Vie Heureuse* avait à l'unanimité exprimé le vœu que votre livre fût désigné comme celui qui aurait réuni tous les suffrages, si les circonstances ne rendaient cet hommage par trop inutile à votre carrière.

Ce n'est pas sans regret que celles qui admirent avec une si active ferveur *La Porte étroite* renonceront un plaisir de publier leur admiration, mais votre volonté sera respectée, cela va sans dire, et d'autant plus aisément que c'est moi qui exécute les décisions du Comité.

Je vous demanderai cependant, pour des raisons que je vous dirais de vive voix si vous m'en donniez l'occasion de ne point communiquer votre lettre.

Et je vous prie aussi de m'excuser si dans le n° de Noël qui paraît à la fin de ce mois, avant le vote votre livre est cité parmi ceux qui avaient été mis à part par le Comité, puisqu'il est maintenant trop tard pour changer cela : le n° est sous presse depuis huit jours. Mais ce premier article n'est guère qu'une chronique bibliographique sur les livres ainsi choisis et j'espère que sous cette forme notre initiative ne vous semblera pas trop indiscreète.

Agréé je vous prie Monsieur, l'expression de mes sentiments les meilleurs.

C. de Broutelles.

5. - GIDE à Mme de BROUDELLES (brouillon)

[Paris,] Dimanche 28 Nov[embre 19]09.

Madame,

[Je m'inquiète de ne pas recevoir]

Après votre aimable [lettre] proposition de]

Vous m'aviez très aimablement proposé de me donner [qu] de vive voix quelques explications qui pourraient me [guider] [ras-sur] beaucoup me servir ; je m'inquiète de n[avoir]e recevoir pas de réponse à la lettre où je vous priais de bien vouloir me dire [où] quand je pourrais [avoir le grand plaisir de] <avoir le plaisir> vous [trouver.] <rencontrer.>

Votre lettre m'a fait comprendre que les craintes que je manifestais d'abord n'étaient point justifiées puisque vous avez de vous-même reconnu que ce prix ne pourrait être de sérieuse utilité à ma carrière ; pour moi je considérais surtout que je ne le pouvais obtenir qu'en l'enlevant à Edmond Jaloux mon ami dont le succès me réjouira plus que le mien propre. Puisqu'il était trop tard pour éviter que mon nom fût prononcé et publié parmi ce[lles]-<eux> des concurrents, je vous laisse agir Madame comme si je ne vous avais rien écrit, convaincu d'après votre lettre que vous agirez pour le mieux – et que vous saurez é[vi-ter]<pargner> [pour les gens mal renseignés l'apparence d'un échec] à qui [+] prétendait <+ ne> pas concourir le gauche et [mortifiante] <désobligeante> posture de l'évincé. C'est pourquoi j[e]'avais pu souhaiter le silence mais tout va pour le mieux dès l'instant que vous parlez de mon livre comme « hors concours ».

Il me semble que je vous ai bien mal dit Madame combien j'avais été touché par votre lettre ; c'est que j'espérais que vous me permettriez de vous exprimer de vive voix ma reconnaissance et mon respect.

[sans signature]

6. - Mme de BROUDELLES à GIDE

[Paris,] Ce Lundi [29 novembre 1909].

Monsieur,

Je suis confuse de vous dire que j'ai bien reçu votre lettre et que j'ai voulu chaque jour y répondre, sans en trouver le loisir à
*7) ← la librairie *7), le courage quand je rentre chez moi le soir après toute une journée du travail accablant de cette fin d'année.

*8) ← Nous devons hier Dimanche aller voir nos amis Rod *8), et j'espérais vous éviter la peine de vous déranger en allant moi-même sonner à votre porte. Mais le travail que, par un incorrigible optimisme, j'espérais finir le matin, a duré tout le jour : je vois bien que je n'arriverais probablement pas à aller à Au-

*9) ← teuil *9). Donc, puisque vous m'y autorisez si amialement, je

vous demande de vouloir bien venir me voir à la librairie un matin de préférence entre 9 heures et midi. Dans la journée j'y serais moins sûrement, cette semaine surtout à cause du prix *Vie Heureuse* et de nombreux conciliabules préparatoires auxquels je veux trouver le temps d'aller pour mieux assurer le résultat que j'espère avec vous.

À mon tour, laissez-moi vous dire, Monsieur, que j'ai été bien touchée de votre lettre de ce matin, de la sympathie et de la confiance que vous me témoignez. J'y ai été d'autant plus sensible que j'admire profondément votre beau livre, le seul, j'ai honte de l'avouer, que je connaisse de vous, je suis heureuse de penser que je connaîtrai bientôt toute votre œuvre et vous-même.

C. de Broutelles.

7. - MARDRUS à GIDE [pneumatique]

Lundi 9 heures matin

12 QUAI D'ORLÉANS

[Paris,] 29 Nov[embre 19]09 - [*de la main de Gide*]

Mon noble Gide que j'aime, que je vous loue pour [votre] <la> lettre si digne, nette et de bon ton dont vous avez honoré la dame en question. Nul mieux que moi, malgré mes apparences de tyran, ne sait s'incliner amicalement devant votre ordinaire attitude dans la vie, [et de] votre fermeté, [de] votre courage, oui. C'est pourquoi vous êtes mon ami, et un des rares que j'estime, vous le savez. Ah ! cher Gide... mais je retiens toute ma tendresse aujourd'hui.

Car je veux vous adjurer par l'amitié qui nous enchaîne et par votre honneur, le nôtre, de ne pas laisser *une minute de plus* cette dame vous mêler dans ses tristes combinaisons « Ad majorem Comitatis [*sic*, pour Committee] gloriam ». Je vous ai *tout* expliqué déjà. Ce qu'elle pourra dire ne sera que duplicité et calculs, simplement pour traîner les choses le plus en longueur possible, et profiter de votre cher nom, notre Gide.

Ô mon ami, je crie vers vous. Entendez-moi.

Immédiatement il faut lui envoyer un « pneu » à son domicile particulier (75 B^d S^t M.) pour cette lettre vous lui direz avec *sévérité* (et politesse) que vous maintenez votre décision *telle quelle*, et que vous tenez *absolument* à ce que votre première

lettre soit lue publiquement dans la séance de ce vendredi-ci. Vous ajouterez que si elle ne veut pas la lire, vous chargeriez M^{me} Duclaux *¹⁰) <ou telle autre dame> de le faire. Et vous demanderez une réponse d'urgence et par pneu. [« une réponse » et « par pneu » sont soulignés au crayon rouge]

→ *10)

Vous exigerez également que *malgré la mise sous presse* de leur n° de Noël (je connais cette rengaine-là, cher !!) votre nom soit rayé, *qu'on le fasse sauter*, coûte que coûte. Je vous en supplie, mon ami.

Puisse Allah couvrir de ses calamités la face des fourbes, le visage du mensonge.

Mais vous, noble ami, qu'il vous garde et vous sauvegarde et qu'il vous protège contre les maléfices des cordes nouées, contre les génies et contre les humains.

Je vous serre contre mon cœur.

CEil.

P. S. Puisque cette « dame » fait la sourde oreille au sujet de l'entrevue (je le savais !), inutile de lui en reparler dans votre lettre. La malédiction sur elle et autour d'elle !

Si d'ici mercredi matin, *au plus tard*, elle n'a pas obéi, avisez-moi d'urgence. Et, en tout cas, éclairez-moi.

8. - GIDE à Mme de BROUDELLES (brouillon)

[Paris, mercredi] 1^{er} Décembre [1909].

Eh bien ! si Madame, voilà bien ce que je craignais. Pour aimable que soit l'article sur *La Porte étroite*, <et je vais vous dire [*un mot illisible*] après] tout le bien que j'en pense] combien je l'aime> il ne m'en pose pas moins comme concurrent et et aux yeux de *tous*, moins quelques rares avertis, [qui concourt] [c'est qui] [celui] <concurrent qui> *a voulu concourir*. Combien faut-il que cela me désoblige, pour [f[aire]orcer] <faire> m[on]a récrimination <passer> avant mes remerciements. [Croyez qu'il est] Je vous supplie à nouveau, Madame, d'excuser mon insistance, mais je vois que je ne pourrai [venir] aller demain matin à *La V. H.* ainsi que je me le proposais ; il faut donc que cette lettre supplée à la conversation que je me promettais d'avoir avec vous : Je tiens absolument à ce qu'il soit spécifié dans le N° où vous reparlerez de ce concours, et sans doute pour en annoncer

le résultat, je tiens à ce qu'il soit spécifié que je [*<ne>*] me suis [*pas*] retiré de la lutte – ou du moins que je ne *<m[e]y>* suis pas [*posé en champion*] présenté. Voici la phrase qui doit indiquer cette [*vacance*] *<abstention>* :

« Monsieur Gide, qui s'était vu compter au nombre des candidats par surprise, nous prie *<(ou nous a prié)>* d'effacer son nom de la liste des concurrents. » ou, si vous parlez déjà de cette liste. « Monsieur Gide nous a prié d[e]'en retirer son nom qui s'y était trouvé porté à son insu. » – C'est à quoi je tiens essentiellement – car je serais désolé après la grande amabilité dont vous avez fait preuve à mon égard, d'être contraint à une protestation ouverte qui pourrait sembler [*la*] marquer [*de*] quelque animosité [*que*]. Je vous supplie de la rendre complètement inutile en adoptant simplement la formule que je vous tends ici. Aucune autre raison de ne pas me donner le prix ne saurait me satisfaire et je ne me tiendrai pour satisfait par aucun autre.

[Mais j'ai hâte de quitter ce *[un mot illisible]*] Puis-je vous dire à présent, Madame, combien m'ont touché les lignes élogieuses de votre revue ^{*11)}. À qui les dois-je ? À coup sûr à une lectrice [*très perspicace et*] attentive et attentionnée. L'analyse de mon livre est excellente ; elle montre cet élan acquis qui transporte mon héroïne jusqu'au-delà de l'amour et la fait outrepasser le but, désespérément. Les trois quarts de lecteurs n'y ont vu qu'une chrétienne qui sacrifie son amour à sa foi, [*cet*] ce qui manifeste la superficielle façon qu'on a de lire aujourd'hui il faut dire que la plupart de livres d'aujourd'hui ne méritent pas d'être mieux lus.

Je ne savais pas que vous connaissiez M. Rod. Je lui garde une grande reconnaissance d'avoir su, [*un des premie*] *<me découvrir ;>* car lui non plus ne connaissait aucun de mes précédents livres – ce qui ne m'étonne guère car voici le premier pour lequel je fais un peu de service – non que je l'estime bien supérieur aux précédents, mais parce que je commençais à me lasser de ce jeu de dupe [*semblable à l'enfant qui se serait*] et de ma confiance un peu trop optimiste dans le flair et la générosité de « la Critique ». J'étais semblable à l'enfant qui [,] par jeu [,] s'est si bien caché qu'on se lasse de le chercher [*et qui v*] ; il voit continuer le jeu sans lui. [*Cette fois-ci j'ai crié « coucou » !*] Au demeurant, peut-être n'aimerez-vous pas du tout mes livres... N'importe ! lorsque cette affaire du prix vous aura laissé quelque loisir, je serai heureux de vous envoyer mon *Immoraliste* dont *La Porte*

étroite n'est que le pendant et la contrepartie. [Je crois que les deux li] Je n'aurais pas écrit l'un sans l'autre.

Au revoir Madame. Peut-être aurai-je le plaisir de vous rencontrer Dimanche prochain chez M^r Rod vers la tombée du jour.

Veillez croire à mes sentiments les meilleurs.

[sans signature]

9. - Mme de BROUTELLES à GIDE

VIE HEUREUSE

Monsieur André Gide

79, BOULEVARD ST GERMAIN

[Paris, vendredi] 3 décembre [19]09.

Un mot en hâte, Monsieur, que je m'excuse de ne pas écrire moi-même. Je vous envoie le texte que je souhaiterais publier dans notre article ; celui que vous m'avez envoyé pourrait, je le crains, blesser les susceptibilités des membres du comité ; il serait cause, surtout, de toutes sortes de complications pour l'avenir. J'ai déjà tant de mal à obtenir que le prix soit donné à des œuvres de réelle valeur ! Il ne faut pas que le comité puisse, l'an prochain, s'autoriser de votre refus pour écarter les vrais talents, et encourager les nullités ou les médiocrités. Ne trouvez-vous pas que le texte que je vous envoie, tant en satisfaisant à votre désir, témoignerait de plus de différence pour l'opinion exprimée par le Comité ?

Agréez je vous prie Monsieur, l'assurance de mes sentiments de sincère sympathie

C. de Broutelles.

J'irai chez Monsieur Éd. Rod dimanche, et j'espère avoir le plaisir de vous y rencontrer.

10 - GIDE à MARDRUS (brouillon)

[Paris, ? vendredi 3 ou samedi 4 décembre 1909.]

Cher Mardrus,

Que [n]<v>otre amitié <pour moi> excite des jalousies, c'est chose à quoi je devais m'attendre. Et si mes autres amitiés [n']ont pu rester, croissant toujours, inaltérables et inaltérées, [croyez bien que] <hélas> je [ne] <n'ose> l'attribue<r> [pas]

[seulement] <uniquement> à la constance de leur ferveur, mais à ce fait aussi que, moins célèbre que la vôtre elle<s> fu[t]<rent> moins en butte aux... prévenances d'autrui.

Je [recon] <suis> profondément indigné (sans les connaître) contre eux, (ou celui []) qui a pu les déformant odieusement vous rapporter telles paroles <mauvaises> que j'aurais dites sur votre compte et que, s'il était votre sérieux ami, il eut <donc> dû [*alors*] relever aussitôt – comme je pense que je l'eusse fait à sa place (et comme je l'ai fait déjà trois fois).

N[ayant]<e gardant> pas grande [mémoire] <souvenance> de mes paroles je ne peux vous redire *au juste* ce que

11. - MARDRUS à GIDE

12 QUAI D'ORLÉANS

[Paris, samedi] le 4 Déc[embre 19]09.

Nous recevons de vous une lettre où vous dites que si vous aviez eu la précaution de garder le silence, vous auriez eu le prix sans aucun doute.

Donc vous mettez en doute les paroles que vous a dites Madame Delarue-Mardrus, après la séance du vendredi 26 novembre, sur le résultat de cette séance.

Je tiens à vous répéter par écrit ces paroles, pour vous prouver combien votre doute est offensant.

Le Vendredi 26 Novembre à l'unanimité, *moins une voix*, (celle de M^{me} Mardrus) votre candidature a été catégoriquement éliminée. Et Madame Dieulafoy ^{*12)}, après une discussion très vive avec ma femme, a conclu ainsi : « Maintenant que la candidature Gide est définitivement rejetée, vu que M. Gide ne présente pas les conditions requises pour le prix, passons à l'examen des autres candidatures. »

→ *12)

C'est ce qui fut fait.

Et depuis lors, pas plus dans cette séance, que dans la séance d'hier, votre nom n'a même été prononcé.

C'est vous dire très clairement que *vous aviez été éliminé bien avant que votre lettre de désistement ne fût parvenue à M^{me} de Broutelles*. En outre M^{me} de Broutelles a « parlé » hier de votre désistement à personne, <du moins devant ma femme.> enfin M^{me} de Duclaux a dit textuellement ceci à ma femme, hier, qui l'interrogeait : « Ô que vous avez raison, madame. Le livre de M.

Gide, est très beau. J'en ai longuement parlé dans le *Times* *13). → *13)
C'est bien dommage que M. Gide ne *soit pas dans des conditions*
du prix.»

– Maintenant madame de Broutelles pourra vous écrire ce qu'elle voudra. *Elle n'osera jamais nier* ce que je vous écris ici. Et elle ne le pourra pas. Vingt dames témoigneront.

– Permettez-moi enfin de vous dire qu'il [m'] nous est impossible désormais de vous voir, si vraiment vous doutez de ces paroles. Et vous me permettriez, dans ce cas, non seulement de vous retirer toute estime, mais aussi de vous demander des explications sur une conduite qui me semble *inqualifiable*.

Docteur Mardrus.

12. - MARDRUS à GIDE [pneumatique]

[Paris,] Dimanche, à 11 h. [5 décembre 1909].

Gide, votre lettre, du fait de la rétraction de vos doutes, satisfait l'homme, en moi ; mais l'ami reste profondément froissé, et madame Delarue-Mardrus l'est autant que moi.

Vos illusions volontaires persistent entières, nous le voyons bien, au sujet de cette ridicule récompense, ridicule seulement s'il s'agit de vous.

Il faut donc – quand cela finira-t-il ? – que je vous explique encore par écrit. Au diable ceux qui aiment l'insistance !

1^o) Vous n'avez guère pu être lâché un dernier moment, puisque vous n'avez guère été soutenu au premier moment que par ma femme et, tout au commencement, par une ou deux voix *vagues* qui se sont hâtées, vendredi 26 Novembre, de se rallier à celles qui ont [voté] conclu à votre élimination.

J'insiste : cela s'est passé le vendredi 26 Novembre, *deux jours au moins* avant que votre lettre arrivât à M^{me} de Broutelles.

Donc vous avez été le candidat éliminé par ces dames, et non point de candidat qui s'est désisté de lui-même. Je vous répéterai cela sur tous les tons et dans toutes les langues. Peut-être qu'alors vous finirez par comprendre et sentir que c'est à partir du jour [que] où je vous [ai envoyé] avais alarmé mon premier avis, *c'[est]-à-d[ire] bien avant la semaine éliminatoire* du 26, que vous auriez dû envoyer votre désistement, sans attendre un « miracle » qui hélas ! ne s'est pas manifesté !

3^o) [*sic*] Quant à la note de *La Vie Heureuse* que vous me communiquez, et qui nourrit vos illusions, c'est *une simple politesse*, d'ailleurs inspirée par vos lettres à M^{me} de Broutelles – lettres trop tardives et qui n'ont servi à rien outre qu'à vous donner cette piètre-satisfaction d'une note *posthume*...

4^o) Enfin, hier, nous étions en soirée chez M^{me} Guillaume Beer *14). Presque toutes ces dames du Comité y étaient, y compris M^{me} de Broutelles (chez laquelle nous devons, du reste, dîner tout prochainement). Et j'ai pu contrôler, *par moi-même*, cette fois, et *point* par *point*, tout ce que j'ai déjà porté à votre connaissance.

→ * 14)

Et maintenant ouf !!

– Laissez-moi enfin ajouter, pour conclure à mon tour, qu'à mes yeux vous êtes désormais, de par vos propres mains, <un> blessé sans gloire, et, à mes yeux, porteur de plomb dans l'aile en telle quantité, au point de vue de *l'amitié*, que je ne sais s'il ne vaut pas mieux que vous gardiez le lit au lieu de sortir vers nous et vers la clarté qui vous fera toujours défaut.

Cultivez votre admirable complication, vos doubles vues enfantines, vos hésitations stériles ; mais sachez que tout a une limite, même l'agacement.

Adieu, avec rancune, vraiment.

D^r. J. C. Mardrus.

13. - GIDE à MARDRUS (brouillon)

[Paris, dimanche 5 décembre 1909.]

Mon cher Mardrus,

[Votre] Le télégramme *15) – où vous m'appelez « mon noble Gide » et où vous me félicitez de « la lettre si digne, nette et de bon ton » etc. que j'avais envoyé à M^{me} de B. est du 29 – Ce n'est donc pas auparavant que notre amitié [(ou plus précisément votre amitié pour moi)] a reçu « du plomb dans l'aile » [ainsi que vous dites]. Qu[e s'est-]<y a-t->il [passé] depuis ? [L] Une interprétation [que vous m'affirmez] [fausse] de l'attitude de « ces dames » à mon égard. Je me suis efforcé dans ma lettre d'hier soir d'<en> enlever [à cette interprétation] [() de fâcheusement et bien involontairement injurieux. [*entièrement biffé*] [Je n'affirme même pas que cette] Je ne cherche même pas à maintenir <en moi> cette opinion ; il se peut en effet qu'elle soit fausse

→ * 15)

et ce que vous me dites m'amène à le croire ; je ne la défends pas : je vous explique que j'ai pu l'avoir]

v. autre feuille

Au nom d'Allah que voulez-vous de plus ?!

Je vous *affirme* que je ne retiens de toute cette stupide affaire que l'ennui <e chagrin> d'avoir peiné la princesse un instant et <le regret> d'avoir pu prêter à une opinion désobligeante de votre part. Si maintenant cette opinion doit persister en votre esprit, il vaut mieux en effet cesser de nous voir ; croyez que ce sera de ma part avec un profond regret ; car [si j'ai pu] <si peut-être j'ai pu> [me méprendre] <commettre> hier [et faire une] <quelque> erreur d'interprétation dans laquelle je ne m'entête [*sic*, pour m'entête] absolument pas – à coup sûr cette erreur vous la commettez aujourd'hui sur mon compte. Au revoir ? – Du moins [ne me refusez pas] que la Princesse sache qu'elle garde en moi un ami tendrement et fidèlement dévoué.

[*Feuillet 2 :*]

[d'en enlever ce qu'avait pu s'y glisser de fâcheusement et bien involontairement injurieux.] Cette interprétation, <que> vous m'affirmez [qu'elle est] fausse, je ne cherche pas à la maintenir, *fût-ce en moi* ; [il se peut en effet qu'elle soit fausse et ce que vous dites m'amène à le croire ; je ne la défends] <+ je vous <ai> expliqu[ais]<é> [que j'ai] <hier comment j'avais> pu l'avoir, et comme quoi elle ne vous lésait en rien. [*déplacé jusqu'ici*] > <je la défends> pas ; [et ne la défendais pas hier] <je [consens] l'abandonne> ; [+]

Au nom d'Allah que voulez-vous de plu

Je

14. - GIDE à Edmond JALOUX

[Paris, lundi 6 décembre 1909.]

Cer ami,

À mardi soir, d'abord, puisque Rod me dit vous avoir également invité (je me promets grand plaisir de cette soirée, où tous deux nous allons marcher à la découverte !) – puis jeudi – pas plus tard que quatre heures si possible.

Votre

A. G[ide].

Votre chaud télég. m'a beaucoup touché. Mais ça y est ; je suis brouillé avec J. C. M[ardrus]... !!

15. - MARDRUS à GIDE

[Paris, mardi 4 janvier] 1910.

Ainsi donc, à Gide, vous avez pu, sans tourner à gauche, traverser notre pont, puis franchir notre île, hier, lundi, à 3 h 1/2 !... Et vous nous laissez cette supérieure initiative de vous nommer, le premier ! Ah ! compliqué des compliqués sur fond de complication !

Qu'importe ! Votre dernière lettre de 1909 se termine par un « au revoir » avec un ? Toujours le doute au lieu de l'action. C'est que vous ne connaissez qu'aux trois quarts la figure du plus *jaloux* des amis, le quatrième restant dans l'ombre du fait de votre inattentif regard. « Et sur leurs regards est un voile » a dit l'Inspiré.

Mais venez, précédé du mot annonciateur, et que l'épanouissement, l'abondance et le plaisir soient autour de ceux qui marchent dans la voie.

De la part du visage de blancheur

Œil.

16. - GIDE à MARDRUS (copie autographe)

[au verso de la lettre précédente, de la main de Gide]

ai répondu - [Paris, jeudi] 6 janv [ier 1910].

Œil illustre, Docteur !

Avec quelle joie mon amitié - car son aile est restée la même - révélera vers vous ! mais pas avant que la vôtre pour moi sache ne plus souffrir du moindre de ces grains de plomb que votre lettre dernière y a mis - et dont, habile opérateur, vous devez aujourd'hui la nettoyer. Est-ce fait ? Dites - Tout aussitôt, jusqu'aux pieds de l'Amande j'irai

André Gide.

17. - MARDRUS à GIDE

« Pavillon de la Reine »

[Paris,] Samedi 5 Février [19]10.

Gide, beaucoup d'eau a passé sous et sur des ponts depuis la

pénombre que vous savez. Maintenant il y a ici beaucoup d'ombre, car un deuil attriste Amande du fait de son père subitement éteint le lendemain de notre arrivée ici ^{*16)}. → *16)

Peut-être... cette visite à l'île S^t Louis pourrait-elle être échangée contre une visite de vous au Pavillon... Nous y serons encore pour quelques jours.

À l'heure actuelle, «Sheridan» ^{*17)} doit être chez vous. → *17)

L'aile dans l'amitié n'a plus un seul grain de plomb : j'ai mis à contribution pour cette extinction tout mon acquis chirurgical.

Indéfectiblement

J. C. M[ardrus]

Notes :

- *1. Plutôt : « Novembre 1909-1910-janvier ».
- *2. Lucie Delarue-Mardrus (1874-1945).
- *3. Joachim Gasquet (1873-1921), poète et critique d'art français. Il était candidat pour le Prix *Vie Heureuse*, avec son recueil de poèmes *Les Printemps* (Perrin, 1909).
- *4. Marguerite Provins, dite Marguerite Burnat-Provins (1872-1952), est une écrivaine, peintre de genre, portraitiste, aquarelliste, illustratrice franco-suisse. Elle était candidate pour le Prix *Vie Heureuse*, avec son récit *Le Cœur sauvage* (Sansot, 1909).
- *5. Victor Cyril (1872-1925) dont le roman *Une Main sur la nuque* (Union de Littérature et d'Art, 1909) avait obtenu un certain nombre de suffrages aux premiers tours du Prix *Vie Heureuse* pour 1909.
- *6. Séverine, pseudonyme de Mme Caroline Guebard, née Rémy (1855-1929), journaliste féminin, qui, 1885-1888, dirigea son propre journal *Le Cri du peuple*. Elle était un des dix-neuf membres du jury pour le Prix *Vie Heureuse*. Cyril était probablement le candidat de Séverine.
- *7. Hachette & Cie (éditeur de *La Vie Heureuse*), 79, bd. Saint-Germain.
- *8. Édouard Rod (1857-1910), écrivain suisse d'expression française, se réclame d'abord au Naturalisme, puis s'oriente à l'inverse vers l'Intuitivisme, avant de publier des romans psychologiques. Gide avait lu avec intérêt son article du *Figaro* (9 janvier 1890) sur « le jeune homme moderne » (voir GIDE, « Subjective », in *Cahiers André Gide I*, Paris : Gallimard, 1969, p. 35).
- *9. « Villa Montmorency », 18 bis, avenue des Sycomores, Auteuil (aujourd'hui Paris XVI^e). Domicile de Gide, de la mi-février 1906 à août 1928.

- *10. Mary Duclaux (1857-1944), plus connue dans les lettres sous le nom de M^{me} Darmesteter, qui était celui de son premier mari, est une des rares femmes qui puissent composer en deux langues avec une égale pureté. Membre du comité du Prix *Vie Heureuse* depuis sa fondation. Voir aussi la note *13.
- *11. Article anonyme paru dans le n° du 15 décembre 1909 de *La Vie Heureuse* (p. 329).
- *12. Jane Dieulafoy, née Magre (1851-1916), est une archéologue, autrice de romans, de nouvelles, de théâtres, journaliste et photographe amatrice. Membre du comité du Prix *Vie Heureuse*.
- *13. Voir Anonyme [Mary DUCLAUX], «Strait is the Gate : *La Porte étroite*. Roman, par André Gide», *The Times Literary Supplement*, 19 août 1909, p. 300, col. 3 et p. 301, col. 1. Nous reproduisons ici une carte postale de Duclaux à Gide, postée le 5 septembre à Ross (Écosse) : « Monsieur, / Je vous remercie beaucoup de votre beau livre. Je l'ai lu avec une rare admiration ; et le bien que j'en pense, je l'ai dit dans le *Times* du 20 août (Supplément littéraire – Ce supplément paraît dans le *Times* le jeudi et dans le Weekly edition le lendemain) mais je tiens à vous en renouveler l'expression en vous assurant de mes meilleurs sentiments / Mary Duclaux. » (Autogr. BLJD γ 1108-1, 1 carte postale 82 × 132 mm écrite au recto seulement à l'encre noire ; c.p. Ross 5.IX.1909 / Paris 8.IX.1909 / Criquetot-l'Esneval 9.IX.1909).
- *14. Élena Guillaume-Louis Beer, née Goldschmidt-Franchett (1864-1949), est une autrice de romans, de nouvelles, d'essais critiques, qui écrivait toujours sous le pseudonyme de Jean Dornis.
- *15. Lettre pneumatique du 29 novembre.
- *16. Georges Delarue mourut d'une attaque cardiaque en janvier 1910 pendant la grande crue de la Seine à Paris. « Les obsèques avaient eu lieu quand la rue de Verneuil, envahie par l'inondation, n'était plus qu'une rivière. On avait dû transporter le cercueil en barque. » (Lucie DELARUE-MARDRUS, *Mes Mémoires*, Paris : Gallimard, 1938, p. 174).
- *17. Il s'agit du roman de Lucie Delarue-Mardrus qui vient de paraître chez Charpentier / Fasquelle (1910) : *L'Acharnée*, dont le jeune héros s'appelle Sheridan de Saintange.

Références des lettres reproduites :

- *. BLJD γ 67-52, 1 enveloppe jaune 150 × 226 mm.
1. Autogr. BLJD γ 667-53, 1 double feuillet 166 × 126 mm (papier à en-tête impr. : « 12 QUAI D'ORLÉANS ») écrit au recto seulement (2 pp.) à l'encre

- noire, sans enveloppe conservée.
2. Autogr. BLJD γ 67-64 / 63 v^o, 1 feuillets 145 × 95 mm écrit au recto seulement (1 p.) au crayon noir ; et André GIDE - Henri de RÉGNIER, *Correspondance (1891-1911)*. Édition établie, présentée et annotée par David J. NIEDERAUER et Heather FRANKLYN, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 1997, p. 267, note 2.
 3. Fragment de brouillon autographe reproduit in *ibid.*, pp. 267-268.
 4. Autogr. BLJD γ 111-1, 1 double feuillet 179 × 134 mm écrit recto verso (3 pp.) à l'encre noire, sans enveloppe conservée.
 5. Autogr. BLJD γ 667-65, 1 double feuillet 177 × 114 mm écrit au recto seulement (2 pp.) à l'encre noire. [Au verso du feuillet, écrit à l'encre noire : « Le Trésorier / C'est désormais à M. Mérouvel »].
 6. Autogr. BLJD γ 111-3, 1 double feuillet 179 × 134 mm écrit recto verso (4 pp.) à l'encre noire, sans enveloppe conservée.
 7. Autogr. BLJD γ 667-57, 1 double feuillet 169 × 122 mm (papier à en-tête impr. : « 12 QUAI D'ORLÉANS ») écrit au recto seulement (4 pp.) à l'encre noire, sans enveloppe conservée. Pneumatique.
 8. Autogr. BLJD γ 667-61, 1 double feuillet 177 × 114 mm écrit recto verso (4 pp.) et 1 feuillet 177 × 115 mm écrit au recto seulement (1 pp.), à l'encre noire.
 9. Autogr. BLJD γ 111-2, 1 double feuillet 179 × 133 mm (papier à en-tête impr. : « VIE HEUREUSE / 79, BOULEVARD S^T GERMAIN ») écrit recto verso (3 pp.) à l'encre noire, sans enveloppe conservée.
 10. Autogr. BLJD γ 667-62, 1 feuillet 205 × 140 mm écrit au recto seulement (1 p.), à l'encre noire.
 11. Autogr. BLJD γ 667-55, 1 double feuillet 167 × 124 mm (papier à en-tête impr. : « 12 QUAI D'ORLÉANS ») écrit recto verso (4 pp.), env. adressée à « Monsieur André Gide / Villa Montmorency / Auteuil / Paris » [« Envoi du docteur Mardrus / 12 Quai d'Orléans, Paris »], c. p. Paris 4. XII. 1909.
 12. Autogr. BLJD γ 667-56, 1 double feuillet 167 × 124 mm écrit verso (4 pp.) et 1 feuillet 181 × 136 mm écrit au recto seulement (1 p.) à l'encre noire, env. adressée à « Monsieur André Gide / Villa Montmorency / Auteuil / (XVI^e Arr.) » [« Envoi du docteur Mardrus / 12 Quai d'Orléans, Paris »], c. p. Paris 5. XII. 1909. Pneumatique.
 13. Autogr. BLJD γ 667-60, 1 double feuillet 178 × 114 mm écrit recto verso (4 pp.) et 1 feuillet 201 × 133 mm écrit au recto seulement (1 p.), à l'encre noire.

14. André GIDE - Edmond JALOUX, *Correspondance (1896-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Pierre LACHASSE, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 2004, pp. 233-234.
15. Autogr. BLJD γ 667-54, 1 double feuillet 181 \times 137 mm écrit au recto seulement (2 pp.) à l'encre noire, env. adressée à « Monsieur André Gide / Villa Montmorency / (Avenue des Sycomores) / Paris », *c. p.* Paris 4.I.1910.
16. Copie autographe à l'encre noire, au verso de la lettre précédente.
17. Autogr. BLJD γ 667-58, 1 double feuillet 207 \times 133 mm écrit au recto seulement (1 p.) à l'encre noire, sans enveloppe conservée.